

## 台湾で現代政治史を教える東大教授

# きよようの人

まつただやすひろ  
松田康博さん (49)

東大教授だが、3月から台北の政治大に招かれ、台湾の現代政治史を教える。講義は全て中国語だ。軽妙な語り口に学生がどっと笑う。

「台湾では独裁政権下で、さまざまなディスコース(言説)が積み重なってきた。その名残を解きほぐさなければいけない

### 「偏り超えた知的な営みを」

「台湾史について、台湾の高校教師は現代に近づくと話さない。日本との関係も植民地統治時代が主で、現代の関係はほとんど習う機会がないから「知識に偏りがある」という。

若者の間では、台湾の主体性を重視する見方が主流だ。「中国化」を進めた初代総統、蒋介石を独裁者のイメージで見ると「それでも『蒋介石時代はいらない』とは言えない。日本人が過去の戦争を引き継ぐのと同じ

「だから当時の資料を読ませ、歴史的な判断の大切さを学ばせる。初めて台湾は、大学2年で留学した戒嚴令下の1985年。街角に憲兵が立ち、庶民は政治的な話題を避けた。対日感情も悪かった。日台関係が良くなったのは最近なのに、それを意識しない「日本の台湾理解も偏っている」と感じる。

「日本の後に国民党の統治が失敗したからこそ、日本の評価が高まった。日本が植民地時代に良いことをしたから、というのは勘違い」と言い切る。

「バイアス(偏り)のない世界はない」と言いながらも、日台双方にあるバイアスを超越した研究者でありたいと願う。

「学生にはそういう知的な営みができるようになってほしい」。授業は6月末まで。思いを伝える熱意に日台の違いはない。



(台北 田中靖人、写真も)